現代フランス社会における仏教受容

満　足　圭　江

1　はじめに

1999年12月，パリのフランス国立社会科学高等研究学院（EHESS）にて，フランスにおける仏教の現状についての学会が「フランス人の仏教（Le bouddhisme des Français）」というテーマで，ダニエル・エルヴュ=レジェ（Danièle HERVIEU-LÉGER）教授を中心に初めて開催された。現代フランス社会における仏教受容に関する社会学的，文化人類学的研究は，ようやく端緒についたばかりであり，それについての研究書が出版されるようになったのもここ２，３年のことで，その数は少ない。本稿では，フランスの研究者による最新の研究を紹介し，今後の発展が期待されるフランスにおける仏教受容に関する社会学的研究の方向性を探るとともに，これまで多くのフランス人信徒を獲得してきた禅仏教とチベット仏教がどのような経過を経てフランス社会に受け入られてきたのかを，その発展に貢献した幾人かの人物像を通して明らかにしたい。さらに，この二つの仏教を代表する教団をいくつか紹介し，現代フランスにおける仏教受容の問題点を論じたい。先にも述べたように，この分野の研究は始まったばかりで，研究者の年齢層は若く，公表された研究成果の数も少ないのが現状である。したがって，本稿においてもフランス仏教界の現状と問題点の一部を素描するに留まるが，将来に向けてその全体像を把握するための一歩となれば幸いである。

2　フランスにおける仏教徒の現状とその特性

現在500万人以上のフランス人が仏教に好感を持っているといわれている。

1994年の調査では200万人であったことを考えると，フランス人の仏教への好意的な関心は飛躍的に増大している。1999年度の調査では，特に35歳－50歳の年齢層が仏教に好意を抱いており，その大半は女性，都市生活者，知的職業に従事している者で構成されている[1)]。

今やフランスには，おおよそ50万から60万人の仏教徒がいると思われるが，その内の約40万人はラオス，カンボジア，ヴェトナムなどの旧植民地からやってきた東南アジア系移民であり，５万人が中国系移民である。フランス国籍をもった仏教徒の数は15万人にも上るが，多くはフランス生まれのアジア系移民の第二，第三世代であり，フランス人で仏教に改宗した者の数は１万人にしか過ぎないと見られる[2)]。以上のように，仏教に好意を感じている者と，仏教を実際に信仰し実践している者との間には，数量的に大きな隔たりがあるのがフランスの現状である。

フレデリック・ルノワール（Frédéric LENOIR）は，マスメディアによる仏教徒数は全く当てにならないとしながら，自らの調査結果をもとに，フランスの仏教徒をつぎの３つのカテゴリーに分けて分析している。ルノワールによると，まず，仏教に好意をもっている者（サンパチザン sympathisant）が60万人以上，つぎに知的，哲学的関心から仏教の教義に親しんでいる者（プロッシュ proche）が10万人から15万人，仏教に改宗し実践している者（プラティカン pratiqaunt）が１万２千人近くいると推定されるが，正確な仏教徒数を把握するのは不可能に近いのが現状である[3)]。

「シンパ（サンパチザン）」とは日常的に仏教を信仰実践していないがダライ・ラマ等の仏教書を定期的に読み，仏教をテーマとしたテレビ番組や映画，出版物に親しみ，アジア旅行などをして，仏教に関する知識を得ている人々を指す。彼らは仏教に良いイメージをもっており，美的で近代的な教えであると評価している。ジャンヌ・モロー，イザベル・アジャーニ，ソフィ・マルソーなど日本でおなじみのスターが，このカテゴリーに属しており，フランス人の仏教に対するイメージアップに貢献している。ルノワールの調査によると，大部分のシンパが「自分は無宗教である」と答えている。また，少数ではあるが，仏教

教団で短期間の研修を受けたことのある者や，自ら仏教徒であると宣言する者もこのカテゴリーに含まれている。彼らは仏教の特色として，エコロジー，非暴力，寛容性，カルマ信仰，チベット問題，精神力の獲得，慈悲，責任倫理，生活の知恵，瞑想などを挙げている。

つぎの「親近者（プロッシュ）」とは，知的関心から仏教に関心をもち，一定の教団に所属することなく，瞑想などを日常的に実践している人々である。彼らの多くが自らを「無神論者」あるいは「不可知論者」と見なしている。彼らにとって仏教とは，宇宙の智慧の総体であり，人道主義であり，「神なきドグマなき宗教」である。彼らは，仏教の特色として，近代性，合理性，実践主義，寛容性，平和主義，慈悲，全ての生き物に対する尊重などを挙げている。さらに，無常，縁起，空，無我などを挙げるインテリもいるが，輪廻転生を信じる者は全体として少ない。なぜなら，彼らにとって，生まれ変わるということは，理性の範疇を超えるものであり，「死後になにかあると常に信じていたい」人間本来の欲求に仏教が迎合した結果に過ぎないからである。

また，特筆すべきことに，このカテゴリーには，カトリック信者でありながら座禅を実践している者も含まれる。その中でも，マリスト派の神父であると同時に禅師であるベルナール・ルロール（Bernard REROLL）が有名である。ルロールは，マスメディアで何度も取り上げられ，フランスでは禅をやっている神父として有名な存在である。階下が禅道場で，上がカトリックの礼拝堂という彼が主宰する文化センターがテレビで紹介され，大きな反響を呼んだこともある。神父を務めながら長年ヨガを教授していた彼は，1980年初頭ドイツで「実存心理学形成と出会いの場（EXISTENTIAL-PSYCHOLOGISCHE BILDUNG UND BEGEGNUNGSSTÄTTE）」という禅センターを創設した精神療法医カールフリード・グラフ＝デュルクハイム（Karlfried GRAF DÜRCKHEIM）に出会い，その後東京の臨済宗天竜寺で修行し禅師の資格を得たという経歴の持ち主である[4]。ルロールは，「フランスで私が出会った仏教を実践しているキリスト教徒は，仏教の教義に惹かれたのではなく，肉体と結びついて働く精神の道を教える仏教に惹かれたのである」と語る。そして，「座禅による内観のおかげで神へのまなざ

しを深めることができる」とも証言している。

その他にも，禅を実践しているベネディクト派の修道院院長であるピエール・ドゥ・ベチュンヌ（Pierre DE BÉTHUNE）は，「私がキリスト僧として続けて来れたのも，仏教のおかげである。カトリック僧院には，肉体を軽視する精神と肉体の二元論の伝統が染み付いている。我々カトリック教徒は受肉した神を信じているにもかかわらず，自分たちが主張する神学のレベルに合った高度な実践手段をもっていない。」と主張する。ベチュンヌは，「僧院における宗教間対話（DIM）」という組織の責任者として，カトリック僧と仏教僧の交流を推進している。毎日一時間の座禅を欠かさない彼は，仏教によってキリスト教を改革できると信じている。

以上のように，キリスト教徒で禅を実践している者の多くが，座禅による内観が，自我と神との出会いを可能にすると評価している。一方，キリスト教を信じながらも，教会を離れて禅を実践している者もいる。しかしその大半が，精神的な彷徨を重ねながらも，最終的には肉体に基盤を置いた禅の実践によって，キリスト教徒として新たな人生を見い出すと，ルノワールはキリスト教にとって希望的な観測を述べている。このように，ルノワールは，第二のカテゴリーである「近親者（プロッシュ）」を，「知的不可知論者」，自分の好みに合わせていろいろな教義を集め再構築する「改造家のサンクレティスト」，「瞑想するキリスト教徒」の3つのグループに細分している。

最後の「実践者（プラティカン）」とは，一般に教団に所属している者を指すが，さらに3つのグループに分けられる。まず第一のグループは，不定期ではあるが教団に通いつつも，仏教徒とか仏教への改宗者と呼ばれることを嫌がる「教団から離れた実践者」である。集団よりも個人で瞑想することを重要とするこのグループでは，信仰の個人化の傾向が顕著である。また，彼らの大部分が，仏教に惹かれた理由として，因果の法によって転生輪廻するというカルマの教えを挙げている。そして，一宗派の教えを全てまるごと信じるのではなく，いろいろな宗派の教えを自分なりにアレンジしている者もかなりいる。伝統的チベット仏教に興味をもち，ラマ僧との出会いによって仏教を信仰し始めた人も

多く見られるが，それに平行し，必要に応じて禅道場に通って座禅を実践している者もいる。彼らの特徴として，宗教的権威の拒否が挙げられる。チベット仏教や禅仏教を実践しながらも，その精神的支柱である僧侶に従うことのない彼らに，教団という組織制度を受け入れることは難しい。

それに対して，第二のグループは，仏教徒あるいは改宗者と自称することに抵抗がなく，教団内での生活に重点をおき布教に励む「忠実な実践者」である。彼らは，教団が主催する研修に定期的に参加し，人生の方針に関して精神的な師である僧侶の意見を尊重する。その大部分がチベット仏教徒である。

第三のグループは，絶えず教団に通っている人々で「熱心な瞑想家」と呼ばれる。テラヴァダ仏教徒はオレンジ色，チベット仏教徒は黄色や紫色，そして禅仏教徒は白と黒の法衣を身につけ，仏教徒であることを社会に顕示しながら生活している者もこのグループに入る。3日，3ヶ月，3年と個人差はあるが，僧院に篭って出家生活を送る者も多い。ラマや禅師の称号を得る者もいる。このグループもチベット仏教徒が大半を占める。

以上ルノワールは，「シンパ」，「近親者」（「知的不可知論者」，「改造家のサンクレティスト」，「瞑想家のキリスト教徒」），「実践者」（「教団から離れた実践者」，「忠実な実践者」，「熱心な瞑想家」）といったように，3つのカテゴリーをさらに細分し，最終的にフランス人仏教徒の7つのモデルを提示している[5]。この7つのモデルを見ても分かるように，フランス人における仏教実践のレベルの差は幅広いが，彼らが仏教に惹かれる動機は，知的，哲学的関心，瞑想による一種の精神療法，肉体と精神の調和，ローマ・カトリック教会に代表されるようなヒエラルキー的制度化された従来の宗教に対するアレルギー，近代性，合理性など，現代フランス人が宗教に求めているものを端的に表している。

ルノワールは，フランスのチベット仏教を代表する4派（カギュ・リング，カルマ・ミギュール，ダグポ・カギュ，リグパ）の648寺院，そして禅仏教では，「インターナショナル禅教会（AZI: Association Zen Internationale）」と「碧巌禅センター（Centre zen de la falaise verte）」の2派に所属する255の禅センターの信徒に質問票を郵送し，そこから回収した903通の有効回答をもとにこのような調査分析を行った。したがって，現代フランス社会の仏教徒を対象とした個人研究として，彼の研究調査はかなり大規模なものであり評価されている[6]。

今やフランスのアカデミズムでも大いに仏教研究への関心が高まり，社会学もしくは文化人類学，心理学などを専攻する多くの学生や若手研究者が，特定の仏教教団について調査研究を行いたいと願っているが，教団の協力を得るのはかなり難しいのが現状である。研究者としての身分を隠し信徒として参加観察を行いたいと思っても，チベット仏教や禅仏教の教団が主催している研修，講演会の大部分が有料であり，長期にわたって参加観察を続けることは経済的にもかなりの負担となる。ルノワールの場合は，ジャーナリストとして各教団とコンタクトをとったことにより，このように多数の有効回答を得ることができたという。

3　ルノワールによる研究の問題点，創価学会を巡って

ルノワールに先立ち現代フランスにおける仏教徒の現状を調査分析した書としては，ブルノー・エチエンヌ（Bruno ÉTIENNE），ラファエル・リオジエ（Raphaël LIOGIER）による共著「今日フランスにおいて仏教徒であること（être bouddhiste en France aujourd'hui）」[7]が有名であるが，7年の歳月をかけたルノワールの研究は労作であり，仏教に改宗したフランス人の証言や仏教がフランスで成功した原因の分析などに関し，現代フランス仏教の研究書としてパイオニア的な位置を占めていることは否定できない。しかし，彼の研究方法に問題がないわけではない。まず，第一に彼がフランスにおける現代仏教の研究対象をチベット仏教と禅仏教に限定していることが挙げられる。もちろん，彼もヴェトナム系大乗仏教やその他のアジア系テラヴァダ仏教を無視しているわけではないが，改宗したフランス人がほとんどいないアジア系移民のための仏教ということで，最初からこれらの仏教を研究対象から除外している。これは方法論上からいってもいたしかたないことであるが，より問題なのは，フランス人の会員数が6千名を超える創価学会を仏教教団ではないと彼が明言していることである。

教祖である日蓮を「本仏の生まれ変わり」「唯一の正統な仏」であるとし，他の宗教を「衰退し，時代遅れ」の教えであると見なす創価学会は不寛容であり，寛容である他の仏教と根本的に異なっていると彼は主張する。また，その攻撃的な布教活動も他の仏教教団と完全に袂を分かつところであると彼はいう。そして，創価学会の特性として，あらゆる生活上の問題を奇跡的に解決するための極めて単純化された信仰実践，社会的に，物質的に成功するための有効な方法として信者に奨励される活発な布教活動，会員に対する強力な組織のコントロール，教祖崇拝などを挙げながら，他の伝統的な仏教の概念や慣習と，創価学会のそれがあまりにもかけ離れているとする。したがって，創価学会は，心理的テクニックや勧誘方法において，仏教教団というよりもむしろ現代社会に数多く存在するキリスト教系セクトに近いと，彼は結論づけている。

ルノワールはこのような立場から，チベット仏教や禅仏教の信者と同等に創価学会員を仏教徒として扱い，研究調査の対象とした前述のエチエンヌの共著「今日フランスにおいて仏教徒であること」を批判している。ルノワールによると，エチエンヌの書は，共同体としての教団，信仰実践，倫理，社会との関係，布教などのテーマを巡って，その各テーマとフランス人仏教徒との関わりを明らかにしているが，全てのテーマにおいて創価学会員と他の伝統的仏教徒との著しい相違が見られるだけで，創価学会員の特殊性は明確である[8]。

しかし，創価学会を仏教教団と見なさない彼の立場はフランスでも特殊であり，大多数の社会学者，宗教研究者が創価学会を現代仏教の代表であると注目している。エチエンヌ以降も，ピエール・ル＝ケオー（Pierre LE QUEAU）のように，創価学会をポスト・モダンの現代社会を象徴する仏教教団であると評価し，学会員を他の仏教徒と同等に比較研究する若手研究者が少しずつではあるが出てきている[9]。フランス創価学会研究の第一人者であるルイ・ウルマン（Louis HOURMANT）[10]は，フランス人の仏教実践者を１万２千名であるとするルノワールに対して，創価学会員１万名を含めて，２万２千名いると見なすべきであると主張する。ウルマンによると，マントラを唱え，聖なるテキストである経を読む創価学会員は明らかに在家仏教教団の信徒である。そして，創価学会を

福音仏教と名づけ，智慧の獲得を目的とする瞑想仏教や西洋に移植されたアジア的倫理仏教と対比させているアメリカの宗教社会学者の学説を彼は紹介する。福音仏教として創価学会は活発に活動し，そのためにフランスを含め若干の国ではセクトと見なされることもあるが，大部分の西欧諸国ではセクトとは見なされていない。フランスにおける創価学会は，他の仏教教団とマージナルな関係にあるが，その会員の大半は様々な職業の，高学歴の中産階級出身者である。会員のほとんどが自己を知るための実践として東洋的瞑想に興味をもっている。瞑想仏教が主に白人だけを魅了するのに対して，創価学会は，アメリカと同様にフランスにおいても，イスラム教徒の家庭で育った者や，ラテンアメリカ人，黒人を惹きつけている唯一の仏教団体である[11]。つまり，ウルマンがいうように，大半の創価学会員も東洋的な瞑想に惹かれて仏教徒となったのであり，他の仏教徒と改宗の動機においてそう変わりはない。セクトと見なされる原因は，主にその活発な布教活動にあり，社会における会員個人の信仰および生活態度に問題があるわけではないのである。

さらに，インド，中国，日本の仏教史研究で知られるベルナール・フォール（Bernard FAURE）は，仏教は，言語や人種と同じく一種の構成（composition）であるとし，仏教がチベットではボン教と，中国では儒教と，日本では神道と結びついて広まり定着していった例を挙げ，仏教の正統性は後の時代に形成されたものであると明言する。すなわち，古くから存在する仏教であるから正統であるという考えに異議を唱えながら，むしろ生きた仏教を現実として見ることを彼は奨励する[12]。また，フランス国立実践高等研究院（École pratique des hautes études）教授で，天台宗，法華経の研究家として著名なジャン＝ノエル・ロベール（Jean-Noël ROBERT）は，仏教には，国境や文化を越えて，信条や教義を決定するいかなる宗教的権威も存在しないと述べ，ヴァチカンの決定に従うローマ・カトリック教会と対比させている。仏教徒であるということは，単に仏とダルマ（法や教義）とサンガ（僧院的共同体）の三宝を敬うことを知っているということであり，この三宝を伝えてきたと見なされる歴史的宗派のひとつに連なっていることであると，彼は定義する。しかし，彼は日本仏教の特殊性に注目

し，日本では僧籍は父から息子へと受け継がれるものであり，むしろ在家運動の中にこそ，宗教的息吹があると言っている[13]。

このように仏教の歴史や現状をよく知っているフランスの学識者は，チベット仏教や禅仏教，東南アジアからきたテラヴァダ仏教だけを正統とする立場をとっていない。しかも，彼らは在家仏教の重要性に着目し，仏教を現代社会の中で生きている宗教として研究することの大切さを訴えている。在家仏教としての創価学会や霊友会（フランス人会員約5百名）などを新宗教とし，チベット仏教や禅仏教，テラヴァダ仏教などを伝統的仏教とするといったように，フランス人信徒を獲得しつつある仏教教団を2つのカテゴリーに押し込めて対立させるのではなく，これら全てを20世紀後半よりフランス社会に定着し始めた宗教として同等に扱い，比較研究の対象としていく科学的な態度が，今後ますます現代フランス仏教徒の宗教意識を解明するための重要な鍵となっていくであろう。

4　フランスにおけるチベット仏教の先駆者，アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネール

つぎに，20世紀に入り，仏教が知識階級の手から離れ，しだいに一般の人々に信仰実践の対象として受け入れられるようになった過程を，仏教実践の先駆者たちが歩んだ歴史を辿りながら考察してみたい。

フランスでも19世紀末から20世紀初頭にかけて，仏教は知識人階級の人々に近代的，合理的な宗教として評価され始めたが，一般のフランス人が仏教の信仰実践に興味をもちだしたのはここ十年にしか過ぎない[14]。それまでは，主に書物によって人々は仏教への知的関心を満たしていた。当初成功を収めた仏教入門書として，禅仏教では，鈴木大拙の「禅仏教についてのエッセイ（Essais sur le bouddhisme zen）」（1930年～34年），「禅の道（La voie du Zen）」（1938年），「仏教（Le Bouddhisme）」（1951年），チベット仏教では，アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネール（Alexandra DAVID-NÉEL）の「仏陀の仏教（Le Bouddhisme du Bouddha）」（1911年），「あるパリジェンヌのラサへの旅（Voyage d'une Parisienne à Lhassa）」（1927年），「チ

ベットの神秘主義者と魔術師（Mystiques et magiciens du Tibet）」（1929年）などが挙げられるが，これらの著作は今でも多くの読者をつかんでいる[15]。

日本でも著名である鈴木大拙についてはここでは触れないが，アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネールはフランスにおけるチベット仏教受容史を語る上で欠かすことのできない人物である。そこで，彼女の生涯を簡潔に紹介しながら，書物による知識だけでは飽き足らず，実際インド，中国，日本，チベットに赴き仏教を学び実践した彼女を，フランス仏教徒の先駆者の一例として論じたい。

アレクサンドラ・ダヴィッドは，ブルジョワ出身のカトリックの母と，ヴィクトル・ユーゴの友人で1848年の2月革命にも参加したプロテスタントの父のあいだに生まれた。思春期よりギリシア哲学，グノーシス主義，東洋的神秘主義に惹かれた彼女は，20歳の頃よりコレージュ・ド・フランス，フランス国立実践高等研究院，東洋語学校，ギメ美術館付属図書館に通い始め，インド宗教学者として高名なシルヴァン・レヴィ（Sylvain LÉVI）にも教えを受けた。しかし，その傍ら，神秘主義や通過儀礼にも興味をもち，様々な秘密結社にも顔を出した。東洋学者を目指しながらも，大学の研究者としての道を閉ざされた彼女は，21歳のとき，会員であった神知学会の援助を受け1年間のインドへの旅に旅立つ。

帰国後，彼女はすぐに神知学会を離れ，オペラのプリマドンナとしてヨーロッパ中を旅行し，フェミニストそしてアナーキストとして活発に活動する。彼女がアナーキストとして出版した初めての著作は大成功を収め，5ヶ国語に訳された。1904年36歳のとき，上流階級出身の鉄道エンジニア，フィリップ・ネールと結婚するが，この結婚はすぐに破局を迎えた。この不幸な結婚生活を忘れるために，彼女は旅に出ることを決意し，インド，チベット，中国，日本を回った。当初数ヶ月の予定の旅が，なんと13年にも及んだ。そして，1924年当時イギリスの政治政策により，西欧人の立ち入りが一切禁止されていたチベットへ密かに国境を越えて入り，首都ラサへ赴く。1927年この冒険談を「あるパリジェンヌのラサへの旅」という題で出版し大成功を収める。しかし，この本については，チベット住民の風俗習慣，信仰をかなり誇張して書いているところ

チベットの僧院までいって，彼女は仏教を実践している。彼女にとっての仏教とは，近代合理的な宗教であり，性差別や階級差別を否定した人道主義的な教えである。しかも，彼女は当初より神秘主義に興味をもっており，チベット仏教はその点においてもまさに彼女の欲求に答える理想の宗教として彼女の前に現れたのである。今日フランス人で仏教に改宗する者も，初めはダライ・ラマの著作などを読み仏教への知的関心を満足させているが，しだいにそれに飽き足らなくなって，教団が主催する様々な研修や講演会に参加し，ついには日常的な信仰実践を始める。彼女の時代のフランス人にとってチベットははるか遠いエキゾチックな国であったが，今ではフランス国内いたるところにチベット仏教寺院やセンターがあり，誰でも簡単に入門することができる。そこには彼女も体験したように，想像していた純粋理念型的な宗教とは全く異なった，生の人間が信仰し実践しているチベット仏教がある。

また，彼女の時代は，科学万能主義を標榜する近代合理精神への反動として，神秘主義，秘教主義が盛り返してきた時代であり，当時のヨーロッパの知識階級に，チベット仏教はその時代の要求に応える教えとして映った。そこで，チベット仏教がフランスで成功した原因として，現代フランス人が仏教に惹かれる最大の要因としていつも挙げられる近代合理性だけではなく，それと同時に多くの現代人が興味をもっているオカルトや神秘主義，秘教主義も含む教えとしてチベット仏教が受け入られたことが挙げられる。

5　フランスにおける禅仏教の受容と現状
——タイセン・デシマルの「インターナショナル禅協会」とチッシュ・ナハト・ハンのヴェトナム臨済禅

上述したように，フランスに禅仏教が入ってきたのは，知識人階級からであり，鈴木大拙の著作によるところが大きい。書物だけで禅を学んでいた時代は，禅は華道や茶道の精神的支柱であるとみなされ，美学的，哲学的なものとして捉えられてきたが，実際フランスで華道や茶道を学ぶ者は数少ない。現在，フランス人で禅仏教を実践している者の大半が，高学歴者で，しかも男性が多数

も多く，評価が分かれている。

ともかく，現地で名高いヒンズー教の賢者やチベットのラマ僧より東洋の言語や宗教を学びながら，彼女はヒンズー教のカースト制度，その他の宗教を含めてのそこでの女性の役割，人間の平等性，仏教の純粋な起源を発見することの必要性などについて疑問をもつようになっていく。そして，いくつかの宗教とは距離をおき始めた彼女にとって，仏教はあくまで近代的で合理的な教えであらねばならなかった。この旅の直前に，彼女は自らが理想とする仏教を世間に知らしめるために「仏陀の仏教」を出版する。この本は，一部のエリートの知識人を対象とした専門書でもなく，大衆受けするような神秘主義やサンクレティズムを扱ったものでもない。それは，西洋の人々に「今日の科学がもたらした結論に近い教え」である仏教を発見させることを目的としたものであった[16]。

この本の中で，彼女は「科学から生まれた現代の精神性に合った教えだけが，個人にとって，また社会解明のためのガイドとなれるというのは疑問である・・・人間が自分の中に感じる傾向性に光を当て，自己の開放へ高い価値を与え，惰弱な宗教の甘ったるいセンチメンタルな感情から人間を引き離すような合理的な教えの強力な援助を得ることによって・・・精神的，道徳的，社会的救済は実現されるが，それは個人がなすべき仕事である。人間だけが苦悩に立ち向かい，自らの力によって苦悩を克服することができ，また克服しなければならない。」[17] と述べている。

このように，彼女は，現代の科学信仰を批判し，合理的な教えである仏教によって人間は自らを救済できると訴え，仏教を人間自立のための教えとして評価している。フランスに帰国し，東洋学，チベット学の専門家として有名になった彼女は，仏教研究に専念し，次々と著作を出版し，ヨーロッパ中で講演しながら，多くのチベット僧をフランスに招聘した。

彼女が辿った過程は，現代フランス人が仏教に出会い，信仰し実践にいたるまでのひとつの雛型を呈示している。知的関心から東洋の哲学思想，言語に興味を持ち，書物によって仏教を学び始めるが，それだけでは飽き足らず，実際

を占める。禅を書物だけで学ぶ時代は過ぎ，柔道，空手，剣道，弓道などの武道と同様に，禅は体と精神のホリスティックな実践を意味するようになった[18]。

このようにフランス人は禅に対し，武道からきた男性的なイメージをもっている。今やフランスでも多くの子供たちが男女を問わず，空手か柔道か太極拳などなにかひとつの武道を習いに近所の道場に通っている。この子供たちの宗教意識の形成に，武道の実践がどのように関わっていくのか，ただ武道というテクニックを習うだけに終わるのか，将来の結果が楽しみである。しかしここでは，弓道などの武道と共に広まった禅と，座禅による瞑想を中心とする禅に分けて，主に後者についてだけ論じるに留めたい。

現在フランス国内には俗に「ドージョー」やセンターと呼ばれている禅道場が100ヶ所以上あり，個人的に小さな規模で近隣の人を集めて座禅を主催しているクラブやグループを入れるとかなりの数に上る[19]。急速に信徒数を増やし，新たなセンターや寺院を設立している教団もある一方，個人的なグループが国内のいたるところで生まれては消えていくので，その実態を把握するのは困難を極める。フランスの禅仏教においては，曹洞宗系が多数を占めるが，その他，弓道，茶道，書道の講習で有名な臨済宗系の「碧厳禅センター（Centre zen de la falaise verte)」，ルノワールによって「瞑想するキリスト教徒」と名づけられたカトリック神父が主宰するエキュメニズム的な禅センター，ドイツで禅の瞑想による精神療法を提唱したカールフリード・グラフ＝デュルクハイムの流れを汲む禅センター，ヴェトナムからの難民を中心に創設され今日ではフランス人信徒も多く得ているヴェトナム臨済禅の教団など多彩である。

その中でも，フランスで一番有力な禅教団は，日本の禅僧デシマル・タイセン（弟子丸　泰仙）が創設した「インターナショナル禅協会（AZI:Association Zen Internationale)」であり，教団側の資料によると国内に5千名のメンバーがいるという。パリ13区のチャイナ・タウンに「巴理山佛国禅寺」という道場をもち，そこを協会本部としている他，ニース，マルセイユ，ナント，リール，ストラスブールなど国内16ヵ所に道場を設置している。また，大都市以外にも地方会員が主宰する数多くのグループがあり，毎週座禅の会を開催したりして，活発

に活動している。パリの道場では，月曜日を除く毎日1―4回の座禅の会を開催し，朝7時半の座禅の参加者には玄米粥が振舞われる。また，毎月一回，日曜日には摂心も行われる。座禅の参加費は，一回につき30フラン（約500円），もしくは月230フラン（約4千円）で，学生，失業者，定年退職者のための割引料金も設定されている[20]。

つぎに，フランスに禅仏教の実践を広めた先駆者であるタイセンの経歴を辿りながら，書物を通し哲学的，知的関心をもつ一部の知識人だけに知られていた禅仏教が，どのようにしてフランスにおいて一般の人々により実践されるようになったのかを明らかにしたい。タイセンは，1914年11月29日，佐賀市近郊で，真宗の熱心な信者であった母と実業家の父のあいだに生まれた。20歳になったタイセンは，経済学と英語を学ぶために上京する。しかし，彼は，ヒンズー教，仏教，キリスト教，西洋哲学の研究に専念するようになる。臨済宗の永平寺で彼は初めて禅に出会うが，座禅中の彼の頭に警策を不器用に打ち下ろした僧侶に対し，彼が「そんなところに禅はない」といって殴りかかったという有名な逸話が残っている。

1936年，彼は神奈川県鶴見にある曹洞宗の總待寺で沢木興道（1880-1965）に出会い，弟子となる。日本が第二次世界大戦に入った直後，タイセンは興道に僧籍を得たいと願うが，師の興道は拒否し，働きながら禅を実践することをタイセンに勧める。極度の近視のために兵役免除となった彼は，インドネシアの炭鉱で5年間働く。自伝の中で，彼はこの5年間が禅僧としての基盤をつくったと述懐している。戦後日本で彼は実業家として紆余曲折の道を辿りながら，師の興道のもとで禅の実践を深めていく。1965年，死の直前に興道はついにタイセンを後継者に指名し，僧侶の資格を与え，西欧へ禅を布教しにいくよう厳命する。その2年後，日本を訪問中のフランスからきた米食を中心とする食事療法主義者の一団に招待を受け，家財を整理し，タイセンはパリへと旅立つ。

1967年7月，座布と袈裟と亡き師の手帳だけをもってパリに到着した無一文のタイセンは，既に53歳であり，一言のフランス語も話せなかった。ダイエット食料品店の裏で雨露をしのぎながら，彼は指圧やマッサージをして生計を立

てた。当時のヨーロッパでは，先述したように，禅は瞑想の方法として，生け花や茶道，書物を通して一部のインテリにしか知られていなかった。タイセンは，このような厳しい環境の中で座禅を組み，フランス人に初めて禅の実践を紹介した先駆者である。

1968年頃より彼の周りにスチューデント・パワー世代のフランス人学生が多く集まり始め，彼はヨーロッパを講演して回るようになる。そして，ストラスブール，マルセイユ，ジュネーヴ，ル・アーヴルに最初の禅道場を開設する。1969年，彼の初の著作である「真の禅（Vrai Zen）」[21] が出版され，翌年「ヨーロッパ禅協会」を設立，この組織は後に「インターナショナル禅協会」と名称を変え発展していく。当時彼に弟子入りした学生たちの関心は，タイセンの説く，現代人としての自己の発展を目的とし，日常生活において実践できる在家仏教としての禅にあった。

その後，タイセンを初め一連の禅師の映画を制作し，ヨーロッパにおける禅の普及に貢献したアルノー・デジャルダン（Arnaud DESJARDINS）を伴って，日本へ3ヵ月ほど帰国したタイセンは，日本の禅仏教界に初めて公式に受け入れられる。それまでの彼は，師の興道もそうであったように，日本の仏教界においてはマージナルな存在であった。フランスに帰国した彼の教団はますます発展し，1972年夏期研修に成功した彼は，パリ14区のペルネッティ通りにパリ初の道場を開く。彼は死の直前までここに住み，座禅や摂心を教授した。1974年には，百名以上の弟子を引き連れて日本を訪問した彼に，曹洞宗より総監という高位の称号が贈られる。

1979年，弟子の修行のために，彼はフランス中部のブロワに近いジャンドロニエールに80ヘクタールの広大な敷地を得，禅寺を建立した。そこには出家した弟子たちが生活しているが，タイセンの教えは僧院における出家生活を重要であると見なしてはいない。1980年，彼の主催する研修会は記録的な成功を収め，夏期，冬期に分けて行われた研修会には世界中から1500名以上の信徒が参加した。「現代のボディダルマ」と呼ばれるようになった彼は，1982年2月病に倒れ，座布と袈裟と師興道の手帳をヨーロッパの弟子たちに託し，死の直前日

本へ帰国し4月30日亡くなった[22]。

彼は道元などの名高い禅師の著作をフランス語に翻訳したり，科学者，心理学者，哲学者，キリスト教会の代表との対話などを企画して，フランスにおける禅の普及に努めた。カリスマ的で独特の個性をもった彼は，身近な弟子たちを戸惑わせることもあったが，それだけに彼を信奉する熱狂的な信者も多かった。彼の説く禅がフランス人に受け入れられた理由として，まず彼が寺院や僧侶のヒエラルキーを保持している日本の権威的な禅仏教にむしろ対立する立場から，在家運動としての禅を実践した点が挙げられる。

彼は「座禅の実践こそが仏教の本質である。座禅の実践なくして禅はない・・・観光や儀式のためだけの美しい寺院は墓場である。瞑想せずして禅の本を読んでも何の価値もない。寺がなく，僧侶でもなく，たとえ牢獄にいても，座禅を組めば，それが真の禅である。座禅は正しい呼吸であり，正しき精神状態であり，真実の姿勢である。考えることを止めるのではなく，気を抜かないように，姿勢に気をつけて，考えるままにまかせるのが座禅である。なぜなら，呼吸や姿勢に集中すれば，精神的態度が自然に正しくなり，智慧が無意識に現れるからである。」と主張する[23]。

このように座禅の実践を重んじ，制度化された宗教である日本の禅仏教を批判している彼であるが，実際は曹洞宗から高位の称号をもらい，自分が一から始め発展させた彼の教団を形式的ではあるが，日本の曹洞宗の系列化に置くことにした。この矛盾した彼の態度が，彼の没後，教団の指導者たちの分裂を招いたことは否定できない。彼の突然の死後，タイセンの古くからの弟子数人は，日本から，タイセンの師興道の弟子である成田禅師を招き，授戒などの儀式を行うことを希望したが，大半のメンバーがタイセン以外の者から授戒を受けることを拒否した。そこで少数派の彼らは教団を離れ，自分たちの道場を開いた。彼らの中でも，ファースト・グアレスキー（Fausto GUARESCHI）はイタリアに道場を開き大成功を収めた。

一方，成田禅師による授戒を拒否した教団幹部たちは「ノーマンズランド（no man's land）」という組織をつくって活動を続けたが，1984年選挙によって選ばれ

た3名の信徒代表の決定により，丹羽禅師から授戒を受けることを決定した。すなわち，この問題は，創設以来独立体制にあった教団が，形の上だけであるとはいえ日本の曹洞宗の系列に入ったゆえに，その厳しい授戒規則に従わなければならなくなったために起こったのである。

フランスでは一般に，「インターナショナル禅協会」は伝統的仏教教団であるとみなされているが，教団の幹部や会員は自分たちの教団は日本の組織から完全に独立した存在であり，日本の儀式中心の寺制度は，生きた禅の価値を伝えていないと批判している[24]。ここに，伝統的仏教を標榜しながらも，信徒の意識はニューエージや新宗教に近いという，フランスにおける禅仏教およびチベット仏教教団の矛盾がある。

タイセン亡き後のフランスの禅仏教界を代表する人物として，ヴェトナム僧のチッシュ・ナハト・ハン（THICH NHAT HANH）が有名である。1929年ヴェトナム中部に生まれた彼は，16歳で出家し，旧都ユエ郊外の禅寺で修行する。ヴェトナム戦争に反対し，彼は非暴力を訴える。平和主義者として，共産党からも，反共主義者からも攻撃を受けた彼は，1966年アメリカを講演旅行中に亡命する。彼は1970年パリ郊外に「さつまいも（Patates douces）」というコミュニティーを創設し，ヴェトナムからの難民を受け入れ援助する組織をつくる。1982年，増大するヴェトナム難民やフランス人信徒の要望に応えて，彼はフランス南西部に「スモモの村（Le Village des Pruniers）」を設立する。現在も百名以上の信徒がそこで暮らしているが，大部分はアジア人である。ヴェトナム臨済禅「ラム・テ（Lam Té）」に属し，1965年に「存在内の秩序（Ordre de l'Inter-être）」という独自の宗派を立てた彼の教えは，仏教徒以外の人々にも開かれている。彼は日本の禅のように公案や摂心を行わず，座禅だけではなく，歩きながら，働きながら，意識を満たす気持ちで瞑想を行うことを説く。彼の規律の少ないソフトな禅は，フランス人の関心を大いに呼んでおり，ヴェトナム戦争に反対した経歴からも，彼についての一般的な評価は高く，フランス禅仏教界の精神的指導者と見なす人も少なくない。彼は，ダライ・ラマと並んで，現在のヨーロッパ社会において，人道主義に基づいた現代仏教の象徴である。彼は80冊以上の著作を英語，

フランス語，ヴェトナム語で出版しており，ヨーロッパに約5千名の信徒をもつという[25]。

6　チベット仏教の受容と現状

先にも述べたようにフランス人の禅仏教徒に男性が多いのに対して，チベット仏教徒には女性が多い。禅は武道とも結びついて合理的で男性的なイメージを与えているのに対して，慈悲を教えの中心に置くチベット仏教は女性を惹き付けている[26]。今や創価学会員を除き，フランス人仏教徒の約70パーセントがチベット仏教の信者であるといわれている。このようにフランスでチベット仏教が発展した要因として，1989年ノーベル平和賞を受賞したダライ・ラマのイメージが大きく貢献していることは否めない。2000年9月，彼はラングドック地方のチベット寺院を訪れ説法を行い，フランスだけではなくアメリカ，カナダ，台湾などから駆けつけた者も含め，8千名の聴衆を集めた。ダライ・ラマのフランス訪問は今回で17回を数える。

彼はフランスに来る度に「私は仏教を布教しに来たのではありません。皆さんのもっている信仰，文化を大切にして下さい。」と語る。「私は一介の僧にしかすぎません」との謙虚なユーモアあふれる弁舌で，彼は生命の内なる自我と精神の平和を説く。他国の人権に敏感なフランス人の多くが，中国から抑圧され，インドへの亡命を余儀なくされたこのチベットの政治的，宗教的最高指導者へ共感と尊敬を抱いている。しかし，実際彼の講演会に通う女性信徒にとっては，亡命した国家元首というよりも，真面目で親しみやすく，慈悲と智慧にあふれた人といったイメージの方が強い。今回彼は説法のテーマとして「覚醒の道」を選び，貪瞋癡の三毒から生じる苦悩を除き幸福へ至るための精神のメカニズムや，慈悲と非暴力について語った。5日間にわたったこの説法の後，彼はパリ郊外のシャルレッティ競技場でも講演会を行った[27]。この講演会の入場券は一般のコンサートやイベントと同様にプレイガイドで発売され，入場券さえ買えば誰でも参加できた。このように，ダライ・ラマの説法や講演会は有料であり，主催者側の広告に注意し前もって申し込めば，チベット仏教の信徒

であるなしを問わず，一般の人々でも参加できるシステムになっている。ダライ・ラマの講演会に行く層には，医療・教育関係者，企業家，職人，インテリ階級，女性が多く見られるが，年齢差はなく老いも若きも参加している。

ダライ・ラマは主にその著作とマスメディアを通して，チベット仏教の寛容性と慈悲，現代社会において仏教が果たす役割を説き，フランスでも人気を博しているが，一方，1970年代よりフランスに定住して，寺院や教団を設立しながら，直接現場で布教活動に専念するチベット僧が多く見られるようになった。その代表として，フランスでチベット仏教が教団として発展するための基礎作りに貢献したカルー・リンポチェ（Kalou Rinpotché）を紹介したい。

カルーは1904年東チベットで生まれ，幼少の折，釈迦の弟子アーナンダ，13世紀チャングパ・カギュ（Changpa Kagyu）を創設したヴァイロカナ（Vairocana）の再来として活仏の認定を受けた。13歳で僧院に入るまで，彼は医師であり活仏でもある父のもとで教育を受けた。その後ノルブ・テンドルップ（Norbou Teundroup）を師として教えを受け，後継者に指名される。1955年チベット国境で中国との紛争が起こり，カルマパ16世と共に彼はブータンに亡命する。1966年ダライ・ラマの後見人に任命された彼は，ソナダ僧院を譲り受け，チベット仏教を代表する4派13名の高僧を分け隔てなく受け入れる。宗派にとらわれない彼は，自ら4派の教えを学ぶ。1960年代末より西洋人の弟子をとるようになり，弟子の一人アメリカ人，ジェームズ・アルビン（James Albin）の勧めにより，1973年彼は16年間にも及ぶ西欧への布教の旅に旅立つ。彼は，西欧世界に100以上のチベット仏教のセンターと，20数ヵ所の出家道場を開設した。

彼は1973年より74年にかけてフランスに滞在し，布教活動に励むと共に，ブルゴーニュにカギュ派の千仏寺を，ノルマンディーにヴァジュダラ派のストゥーパを建立し，パリとドルドーニュにもセンターを設立した。彼は1989年ソナダで亡くなったが，1997年親戚筋にあたる7歳の少年が彼の生まれ変わりとして活仏の認定を受け，後継者ヤングシ・カルー・リンポチェ（Yangsi Kalou Rinpotché）と名乗り，彼の残した西洋の寺院を回って教えを授けている[28]。

フランスには現在大小合わせて140近くのチベット仏教センターがあるが，そ

の中でもカギュ派のセンターが一番活発に活動している[29]。これは，チョグヤム・トラングパ（Chögyam Trungpa）やチュジェ・アコング（Chujé Akong）など多くのカギュ派僧がフランスでの布教に努力したためである。しかし，カギュ派以外にも，フランス人と結婚し，1974年にセンターを開設したサキャ派のフェンデ・リンポチェ（Phendé Rinpotché），1981年パリにセンターを開設し，国際的な「リグパ（Rigpa）協会」を設立し成功を収めているニンマ派のソギャル・リンポチェ（Sogyal Rinpotché）などが知られている[30]。ちなみにフランスに現存するチベット仏教寺院数およびセンター数における4派の割合は，1998年現在，カギュ派61パーセント，ニグマ派10パーセント，ゲルグ派9パーセント，サキャ派4パーセント，その他16パーセントとなっている[31]。

現在フランスでは，百名を越す男女が出家生活を送っているチベット僧院として，ゲルグ派のトゥルーズ近郊にあるナランダ僧院と，カギュ派のオーヴェルニュにあるボスト僧院の2つがマスメディアを通してよく知られている。しかし，ここではフランスのチベット仏教を代表する教団として，カルー・リンポチェよりチベット僧の称号を得た初のフランス人であるドニ・テンドルップ（Denys Teundroup）が率いる「カルマ・リング（Karma Ling）」を紹介したい。1949年パリに生まれたドニは，医学，心理学，哲学を志すが，結局東洋の伝統的思想に興味をもち学ぶ。1968年インドでカルー・リンポチェと出会い弟子となる。パリに戻った彼は，国立東洋語学校でチベット語を学ぶ。翌年インドの師のもとへ行き，チベット仏教の伝統的理論と実践を学ぶ。そこで，彼は師のカルーだけではなく，カルマパ16世を初め様々な宗派の師より教えを受ける。その後カルーのアメリカ，ヨーロッパの旅に通訳として同行し，3年間の出家生活を送るためのセンターを西欧世界に創設するため尽力する。そして，彼はカルーより，サヴォワに開設された「カルマ・リング学院（Institut Karma Ling）」の責任者に任命され，今日にいたっている[32]。

「カルマ・リング」には，教団の発表によると，約千名の信徒と1万名のシンパがいる。そこでは3年間の出家生活が送れるだけではなく，様々なセミナーが企画され運営されている。そこでの活動は，担当の教師と相談の上，10日間

から3年まで自由に選べる出家コース，一週間コースと土日コースに分かれた瞑想やヨガの実践クラス，「ダルマ学校」と呼ばれる教義の講習会，ダンスなどの文化的催しといった4つの柱からなっている。入門者は，サマタ・ヴィパスヤナ（Samatha-Vipasyana）という沈黙の瞑想とダルマ・ヨガの実践から始める。ダルマ学校は，三段階に分かれており，A階では釈迦の生涯，インド仏教史，チベット仏教史，カルー・リンポチェを初め著名なチベット僧の生涯と著作，B段階ではダルマとアビダルマ，八識などの大乗仏教論，C段階では主としてヴァジュラナを学ぶ。4つ目の柱の文化的催しとして，カトリック神父を招いての仏教とキリスト教間の宗教間対話，「インターナショナル禅協会」の僧による座禅と読経の講習，タントラ・ヨガの講習，エジプトダンスなどが企画されている。この教団における最大の行事は，毎年夏に開催される「ゲサールの集い（Assemblée Gésar）」である。2001年1月1日より12月31日までの一年間，ドニは隠居生活に入り誰にも会わずに修行することを宣言しているが，8月19日のこの集いには例外的に出席して，仏の内なる慈悲である「チャンレズィ（Tchènrézi）」という瞑想を教授する予定である。

このセンターの日課として，朝7時から8時までサマタ・ヴィパスヤナの瞑想，19時より45分間経を唱えながらチャンレズィの瞑想が行われている。さらに，毎年7月，8月にはガイド付の一般見学が有料で一日一回実施されており，信者でなくても海抜800メートルの風光明媚な旧カトリック僧院の敷地内に建てられた寺院や教団施設を見学することができる。また，1997年にはダライ・ラマがここを訪れ，多くのジャーナリストや一般参加者を前に説法し，世界中から集まった他宗教の代表と宗教間対話を行い，この教団の宣伝に一役かったことも記憶に新しい。

確かにここではいくつかのチベット用語が使われているが，チベット語はあくまで祭儀用の言語とされ，重要な儀式は除き，朝夕のお勤めを初め全ての宗教実践，講習がフランス語で行われており，この教団がフランス人信徒を多く集め，フランス社会において成功した要因となっている。カルー・リンポチェの念願であった現代人の生活に合った仏教の理解と体験，東洋と西洋の伝統文

化の交流を目的として，この教団は活動し発展を遂げている。チベット仏教の正統性をあえて表に出して訴えず，他宗教への理解と尊敬を示し対話を望む寛容な態度が，現代フランス人に人道主義的宗教として映り，家族や一般社会を離れて出家する信徒がいるにもかかわらず，伝統的仏教教団として高い評価をこの教団は受けている。そのため，この教団を基盤として設立された「ダチャング・リメ修道会（Congrégation Dachang-Rimé）」は，1994年フランス政府よりカトリック，プロテスタント，ユダヤ教，イスラム教の修道会と法的に全く同等な初の仏教系修道会として認められた[33]。

60年代末より今日にいたるまで，チベット僧たちは寺院やセンターの建設，フランス人僧侶の育成，経典や入門書のフランス語での出版などを積極的に行い，常に第一線で布教活動に取り組んでおり，寛容で布教活動に熱心ではないというチベット仏教に対するフランス人一般のイメージとのずれが見られる。また，ダライ・ラマを初め高い地位にある僧たちは，教団の伝統維持に陰で努力しており，教団運営，信徒の信仰実践に関する僧侶によるコントロール・チェックもかなり厳しい。そこにチベットの伝統文化としてのチベット仏教と，現代フランス人が改宗し実践しているチベット仏教に，実践，理論，教団運営の面で格差が出てくるのは当然である。僧侶間でも，伝統をそのまま守ろうとする者と伝統よりも現代のフランス信徒に合った信仰実践を重要視する者とのあいだに対立が起こっている[34]。これまでチベット仏教は，フランス社会において，純粋かつ平和主義的な理想の仏教としてのイメージを保ってきたが，社会学者や文化人類学者による教団の事例研究がいくつか発表され，またマスコミが取り上げる回数が増えるにつれて，フランスでの教団間，僧侶間の紛争が少しずつではあるが世間に知られるようになってきている[35]。

フランス人が仏教に改宗する主な動機として，宗教的権威としてのローマ・カトリック教会への失望や，その時代に逆らった保守的傾向への嫌悪がよく挙げられる。しかし，チベット仏教のフランス社会への定着が進むに従い，その本来の性質であるダライ・ラマを頂点としたヒエラルキーや伝統保守的態度が明らかになり，カトリック教会とのイメージ差は減少していくであろう。ルノ

ワールは，フランス人で仏教に改宗した者の多くが，仏教の反近代的な保守的体質に失望し，最終的にはカトリックやユダヤ教など改宗前の信仰へ戻ってくると言っている[36]。しかし，フランス人で仏教に改宗した者を対象にした改宗以前の信仰についての調査結果では，無神論者，無信仰者が過半数を占め，キリスト教徒やユダヤ教徒だったものは少数派で，新宗教への改宗者と同じ傾向を示している[37]。したがって，ルノワールのように，多くの仏教徒がフランスの伝統宗教であるカトリックやユダヤ教に戻ってくると断定するのは時期尚早であるといえよう。

7　フランス仏教界の利益を代表する3団体

現在フランスには，多数の仏教教団が参加している包括的な仏教組織の代表として，フランス仏教連合，ヨーロッパ仏教連合，チベット仏教連盟の3団体がある。その中でも一番の古株が「フランス仏教連合（UBF: Union Bouddhiste de France）」であり，1986年仏教研究者のジャック・マルタン（Jacques MARTIN）を会長として設立された。テラヴァダ仏教を初め，チベット仏教，禅仏教などフランスに現存する仏教団体の約80パーセントがこの団体に所属している。「全宗派の仏教徒のために，公権力より真実の代表権を獲得し，伝統の多様性を尊重しながら，人類の偉大なる精神的潮流のひとつである仏教を代表すること」を目的とした仏教連合は創立1年目にしてフランス政府より仏教界を代表する団体として認められ，これによって仏教はキリスト教，ユダヤ教，イスラム教と並んで，公的な市民権を得た。そして，仏教連合は社会保障機関である「司祭健康保険組合」と「司祭老齢年金相互金庫」の会議メンバーとなった。1988年国務院は，内務省にチベット教団「ダグポ・カギュ・リング（Dagpo Kagyu Ling）」を修道会として公的に承認するように勧告した。その後30以上の仏教団体が政府公認の修道会として認可され，税法上の優遇措置を受けている。1990年には，2名の仏教僧が刑務所付き司祭の任命を受けた。1997年には，フランス国立第二チャンネルで毎週日曜日の朝放送されている一般向けの宗教番組において，キリスト教，ユダヤ教，イスラム教と肩を並べて，15分間ではあるが「仏教徒

の声（Voix bouddhistes）」という仏教コーナーができ，その制作責任者に仏教連合が任命された[38]。

以上のように，フランスにおける仏教の社会的，また公権力による認知に，フランス仏教連合のこれまで果たしてきた役割は大きいが，この団体のメンバーではない仏教団体も多数あり，その独占的な体制について批判も出てきている。

「チベット仏教連盟（FBT: Fédération du bouddhisime tibétain）」は，ダライ・ラマを初め多くのチベット僧をフランスに招聘するために結成されたが，その強い政治的性格のため，現在では分裂状態にあり，活動をほとんどしていない。特に，16世カルマパの後継者問題で，ダライ・ラマの認定したカギュ派の後継者を認めないゲルグ派はこの連盟から脱退した。

「ヨーロッパ仏教連合（UBE: Union bouddhiste européenne）」は，カルマ・リングのドニ・テンドロップを会長として，伝統や宗派の違いを越えて全ての仏教徒に開かれた団体であり，フランスだけではなく他のヨーロッパ諸国の教団も参加している。そのメンバーは，上記の2つの団体に所属しながらもヨーロッパの仏教界を代表するこの連合に入った教団と，なんらかの理由で上記2つの団体への参加が認められなかったか，もしくは参加を希望していない教団に二分される。さらに，1996年ドニ・テンドルップは「ヨーロッパ仏教大学（Université bouddhique européenne）」を創設し，宗派を超えて，様々な教団の専門家による講演会や研修，文化的な催しを一般に公開し，哲学思想，文化としての仏教の普及に努めている。

以上のようにフランス仏教界の状況は，一枚岩とはいえず，今後チベット仏教内での内紛を初め，いろいろな問題が表面化してくることが容易に想像される。「フランス仏教連合」だけを仏教界の窓口とするのではなく，現実に即した対応がフランス政府にとってのこれからの課題となるだろう。そのためにも，各教団についての研究調査がさらに進展すると共に，それに耳を傾ける政府関係者の姿勢が重要である。

8　結びにかえて：現代フランス人の宗教意識と仏教

最後に，フランス人仏教改宗者の受容態度およびその特性をいくつか取り上げながら，現代社会に生きる宗教としての仏教受容に関する問題点を簡潔に論じたい。

まず，西洋人の仏教受容の態度として，つぎの3タイプが挙げられる。第一に，科学的進化論に基づき，仏教を近代合理的な宗教として捉える態度がある。すなわち，仏教を西洋のローマ・カトリック教会などの教条的な宗教に対立した東洋のアルターネーティヴな宗教と見なす立場である。つぎに，仏教をエキゾチックな智慧の総体として捉えるロマン主義的態度がある。最後に，20世紀初頭の神知学主義者が提唱したような，仏教を不可知論的であると同時に神秘主義的宗教として捉える態度である[39]。この3つの態度は，19世紀の知識人たちが仏教に出会ったときから今日にいたるまで，西欧人の仏教へのアプローチの3大支柱となっている。しかし，当初は東洋学者などの専門家による仏教入門書を読み，実践なしに観念だけで仏教を学んでいたのに対し，現代では個人が自分の好みに合わせて，いろいろな宗派の教えを取捨選択しながら，現代人の宗教意識にあった仏教を再構築し実践している点が異なっている。例えば，フランス人でチベット仏教に改宗した者の多くは，この仏教を近代合理的であると同時に，密教的な要素も含んだ教えとして評価し，さらに身体と精神のホリスティックな信仰実践などカトリック教会にないものを求めている。彼らは教団側の教えをそのまま受け入れるのではなく，社会や個人生活に関する自己の問題意識に基づいて様々な教えを取捨選択しながら，体験を通し各自の仏教観を築いていく。教団もこのような信徒の要望に応じて，伝統的な教義や瞑想を伝えるだけではなく，環境との調和，ストレス，自我の発展，他者との関係など現代社会で生きていくために不可欠な問題を研修で取り上げるよう努めている。

さらに，フランスの仏教教団の中には，フランソワーズ・シャンピオン（Françoise CHAMPION）が提唱しているような「神秘主義的，密教的星雲

(nébuleuse mystique-ésotérique)」として，瞑想などの心理学的療法の機能を果たしながら，生まれては消えていくものが少なくない[40]。したがって，前にも述べたように，教団の数はもとより，いろいろな教団を渡り歩く人々が多いので，フランス人仏教徒の数を把握するのは困難を極める。また，フランスの一般社会において，仏教は伝統的宗教として高い評価を受けているが，実践の段階になると，伝統的な実践様式や儀式などが極めて忠実に踏襲されるにもかかわらず，フランス人信徒の受容態度や信仰実践についての解釈が，ニューエージや新宗教の信徒のものと同じ傾向を示すというのも興味深い。

チベット仏教や禅仏教を実践するには，ラマ僧あるいは禅師などの精神的な師の存在が不可欠であるが，この師弟という概念は西洋と東洋では全く異なっている。カリスマ的な教祖への熱狂的な信奉は世界中どこでも見られるが，茶道や武道の師匠を人生の師であるし，尊敬の念を抱くような日本的な考えはフランスでは見られない。ここでは，茶道や武道の技術を教えてくれる優れた師匠として尊敬の感情をもつことはあっても，それが直ちに精神的人生の師とはならないのである。仏教を近代合理的な教えとして捉えている現代のフランス人信徒が，チベット僧や禅僧に対して抱く感情もそれに近いものがある。フランス人信徒の知的探究心には定評があり，家庭や職場など現実生活に関する問題から，ダルマとは何か，なぜ自分は人間として生まれてきたのかといった存在論まで，ラマ僧や禅僧にいろいろな問いかけをする。そこでは僧侶たちに，あるときは精神分析医，あるときは魔術師といった役割が求められる。また，信徒が一方的に質問するだけに終わり，僧とのコミュニケーションがなりたたないこともしばしばである[41]。この問題は，西洋と東洋の一種の文化的ギャップを呈示している。

仏教思想の普及によりフランス人の中でも生命の再生，輪廻を信じる人が圧倒的に増えてきた。しかし，フランス人にとっての輪廻とは楽観主義的なもので，この世にまた生まれてくることができるという永遠の生命を知った喜びであり，この苦しみに満ちた世界に何度も生まれ変わってこなければならないという悲観主義的な面は知られていない。したがって，仏教修行によって輪廻を

断ち永遠の涅槃に入るという考えはなく，この世での現世内的幸福を願って仏教徒となる者が多い。一方，カルマについては，現在の不幸は過去の悪行によるものであるとの解釈が主流を占め，そのために社会的に恵まれていない者や，身体や精神に障害をもつ人々に対し，その人の過去世のカルマが原因であるとの厳しい見方をする傾向がある。すなわち，多くのフランス人がキリスト教の原罪の影響を受け，カルマを静的に捉えており，カルマを変革できる生命のダイナミクスとして考えている者は少ない。

現在フランスの若者は，仏教に対し「よりよく個人を開花させ，より希望を与え，近代社会によりよく適応し，現代の問題によりよく答えてくれる宗教である」との良いイメージを抱いている[42)]。しかし，今後仏教が様々な形でフランス社会により広く定着していくにしたがって，上に述べたような受容過程における文化的ギャップ，伝統的神秘主義的宗教と近代合理的宗教としての二面性を初め，フランスにおける仏教が内包する複雑性がしだいに明らかになってくるのは必然である。これまでの単なる仏教賛美に終始したり，好奇心だけで仏教をフランス社会に紹介するやり方から，フランス仏教徒の抱えている現実的な問題ひとつひとつに焦点を当てた研究がますます重要になってくるであろう。日本の禅仏教からチベット仏教へ，フランス仏教界の主軸は移ってきているが，21世紀のフランスで仏教はどのような変貌を遂げるのであろうか。多くの社会学者や宗教研究家がいっているように，東洋から輸入された「フランスにおける仏教」から，かつて仏教がインドからアジア諸国に広まったように，フランス独自の国土，文化，国民性に根ざした「フランス仏教」へと変容していくことができるのか，それとも一時的なブームに終わってしまうのか，その進展に興味は尽きない。

注

1）世論調査機関 BVA によって1999年 9 月実施された15歳以上のフランス人1005名を対象とした調査において，11パーセントが仏教に親近感をもっていると答えている。*Psychologie*, No.181, décembre 1999, p.68.

2）BERNAMON, Charles, *L'Avenir des religions en France*, Paris, Editions du Rocher, 2000,

p.51.

3）LENOIR, Frédéric, *Le bouddhisme en France*, Paris, Fayard, 1999, pp.35-93. *«BOOUDDHA CE QU'IL DIT VRAIMENT», LE NOUVEL OBSERVATEUR*, No.3-9 Août 2000, p.11.

4）Bernard REROLL については，RONCE, Philippe, *GUIDE DES CENTRES BOUDDHISTES EN FRANCE*, Paris, Noêsis, 1998, pp.275-276を参照。
Karlfried GRAF DÜRCKHEIM については，ROMMELUERE, Eric, *GUIDE DU ZEN*, Paris, Librarie Générale Française, 1997, pp28-29を参照。

5）LENOIR, *op. cit.*

6）*ibid*, p.407.

7）ÉTIENNE, Bruno, LIOGIER, Raphaël, *être bouddhiste en France aujourd'hui*, Paris, HACHETTE, 1997.

8）LENOIR, *op cit.*, pp.18-21. ルノワールには，ナタリー・ルカ（Natalie LUCA）との共著 *Secte, mensonges et idéaux*, Paris, Fayard Editions, 1998 があり，この中で創価学会をセクトとして攻撃している。

9）LE QUEAU, Pierre, *LA TENTATION BOUDDHISTE*, Paris, Desclée de Brouwer, 1998.

10）ルイ・ウルマンによるフランス創価学会についての研究書として，HOURMANT, Louis, *«TRANSFORMER LE POSON EN ELIXIR»*, dir. CHAMPION, Françoise, HERVIEU-LÉGER, Danièle, *de l'émotion en religion*, Paris, Centurion, 1990, *«La Soka Gakkai: un boudhisme «paria» en France?»*, dir.CHAMPION, Françoise, CHOHEN, Martine, *Sectes et Démocratie*, Paris, EDITIONS DU SEUIL, 1999などがある。

11）HOURMANT, Louis, *«L'attrait du bouddhisme en Occident», Sciences Humaines*, No.16, Juin 2000, p.30.

12）FAURE, Bernard, *«Ses quatre vérités... et les autres», LE NOUVEL OBSERVATEUR*, No.3-9 Août 2000, p.15.

13）ROBERT, Jean-Noël, *«Dharma, Sangha, Nirvana－Bouddha, sa vie, son oeuvre», LE NOUVEL OBSERVATEUR*, No.3-9 Aout 2000, p.10.

14）満足　圭江，『フランスにおける仏教受容史－19世紀の宗教研究を中心に－』，「東洋哲学研究所紀要」第13号，1997年，pp.88-101。

15）SUSUKI, Daisez Teitaro, *Essais sur le bouddhidme zen*, 3 vol., Paris, Albin Michel, 1972. DAVID-NÉEL, Alexandra, *Le Bouddhisme du Bouddha*, Paris, Plon, 1911, rééd. Presse Pocket, 1989. *Voyage d'une Parisienne à Lhassa*, Paris, Plon, 1927, rééd. Presse Pocket, 1980. *Mystiques et magiciens du Tibet*. Paris, Plon, 1929, rééd. Presse Pocket, 1980.

16）アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネールの伝記には，禅僧で作家のジャック・ブロス（Jacques BROSS）が書いた *Alexandra DAVID-NÉEL*, Paris, Albin Michel,1977とジャン・シャロン（Jean CHALON）の *Le Lumineux Destin d'Alexandra DAVID-NÉEL*, Paris, Perrin, 1985などがある。

LENOIR. Frédéric, *La rencontre du bouddhisme et de l'Occident*, Paris, Fayard, 1999, pp.215-217, pp.226-230.
OBADIA, Lionel, *Bouddhisme et Occident, La diffusion du bouddhisme tibétain en France*, Paris, L'Harmattan, 1999, pp.112-113.

17) DAVID-NÉEL, Alexandra, *Le Bouddhisme du Bouddha*, pp.7-8.

18) 武道における宗教性については，LENOIR, Frédéric, *«Les spiritualités orientales en Occident», Encyclopédie des religions thèmes 2*, Paris, Bayard Editions, pp.2380-2381を参照。

19) RONCE, *op.cit.*, pp.543-544.

20) *ibid.*, pp.247-250.

21) DESHIMARU, Taisen, *Vrai Zen*, Paris, Le Courrier du livre, 1969.

22) DESHIMARU, Taisen, *Autobiographie d'un moine Zen*, Paris, Robert Laffont, 1977, rééd., Lyon,Terre du Ciel, 1995.
DE SMEDT, Marc, *Le Rire du Tigre, Voyages avec un maître zen*, Paris, Pocket, 1996.
ROMMELUERE, *op.cit.*, pp.93-94.

23) DESHIMARU Taisen, *Questions à un maître zen*, Paris, Albin Michel, 1984, pp.149-150.

24) LENOIR, *op.cit.*, p.282.

25) RONCE, *op.cit.*, pp.61-74.
ROMMELUERE, *op.cit.*, pp.101-102. p.104.
LENOIR, *La rencontre du bouddhisme et de l'Occident*, pp.284-285.

26) LENOIR, *«BOUDDHA CE QU'IL DIT VRAIMENT», op.cit.*.

27) TINCQ, Henri, *«Le dalaï-lama pèlerin d'un Larzac aux couleurs tibétains», Le Monde*, le 22 septembre 2000, p.15.

28) RONCE, *op.cit.*, pp.102-103.

29) *GUIDE DU TIBET EN FRANCE ET EN EUROPE*, Editions Claire Luimière, 2000, pp.5-26.

30) OBADIA, *op.cit.*, p.117.

31) *ibid.*, p.176.

32) RONCE, *op.cit.*, pp455-456.

33) *ibid.*, pp.440-455.
Rrogramme 1999-2000, Programme 2000-2001, INSTITUT KARMA LING, Centre du Dharma.

34) OBADIA, *op.cit.*, p.151.

35) LENOIR, *Le bouddhisme en France*, pp.376-378.
GAUTHIER, Ursula, *«Du rififi chez les lamas» LE NOUVEL OBSERVATEUR*, No.3-9 Août 2000, p.16.

36) LENOIR, *op.cit.*, p.278.

37) OBADIA, *op.cit.*, pp.194-196.

38) LENOIR, *op.cit.*, pp.362-363.
GIRA, Dennis, *Comprendre le boudhisme*, Paris, Bayard Editions/Centurion, 1989, p.195.
KONÉ-EL-ADJI, Alioune, *«Le Bouddha cathodique: construction de l'image du bouddhisme à la télévision française», Média et religions en miroir*, dir. BRÉCHON, Pierre, WILLAIME, Jean-Paul, Paris, PUF, 2000, pp.93-119.

39) HOURMANT, *op.cit.*, p.28.

40) CHAMPION, Françoise, *«La Nébuleuse mystique-ésotérique», de l'émotion en religion*, pp.17-69.

41) OBADIA, *op.cit.*, pp.155-156.

42) CSA, La vie, RTL の三社による合同世論調査結果, *«Dieu intéresse-t-il les jeunes?», La vie*, No.2691, 27 mars－2 avril 1997, pp.18-30.

（まんぞく たまえ・ヨーロッパ・センター研究員）